

テーテンス『一般思弁哲学について』とカント

佐藤慶太

はじめに

ヨハン・ニコラウス・テーテンス (1736/1738-1807) は、「ドイツのロック」と称された哲学者であり¹、心理学史の文脈では、「心理学的方法論について徹底的な説明を最初に行った心理学者」と評されてもいる²。執筆された論文のテーマは多岐にわたり、神学、教育学、言語哲学、語源学、数学とそれの物理学、建築への応用、さらには雷雨の際の取るべき措置、保険制度、予防接種などにも及ぶ³。だが哲学史研究において特に注目されるのは、彼が『純粹理性批判』(第一版：1781年、第二版：1788年)に与えた影響である。カントがこの著作を仕上げるにあたって、1777年に出版されたテーテンスの『人間本性とその展開についての哲学的試論』(以下『試論』)を入念に読解し、そこから多くのアイデアを仕入れたということはほぼ間違いない⁴。ヴレーショベールによれば、いわゆる「心理学的演繹」や、「想像力 (Einbildungskraft)」、「知性 (Verstand) と理性の区別」⁵といったモメントは、明らかに『試論』に由来するものである⁶。テーテンスの影響を過大評価すべきでないとするベックも、「三重の総合の理論、経験的図式の理論、内官の理論のいくつかのアスペクト(および疑いなく、そこにおけるいくつかの混乱)」に、テーテンスの「きわめてはっきりとした影響」を認めている⁷。

このように、『試論』の概念や着想、とりわけ心理学的なそれらが『純粹理性批判』のうちに流れ込んでいることはしばしば指摘されるが、テーテンスからカントへの影響を考えるための切り口は、これだけではない。今一つ注目すべきは、『純粹理性批判』の根本術語「超越論的 (transscendental)」⁸をめぐっての両者の関係である⁹。テーテンスは『一般思弁哲学について』(1775年：以下『思弁哲学』)において、「存在論 (Ontologie)」を「超越的哲学 (die transcendente Philosophie)」と言い換えているが (cf. S.23)¹⁰、カントがこれを踏まえて自らの「超越論的哲学 (die Transscendental-Philosophie)」構想を練り上げていったと考えることができる (transcendental と transcendent は『純粹理性批判』以前には完全に互換性をもっていた¹¹)。『試論』とは異なり、『思弁哲学』はカントの所蔵書籍リストのうちに入っていないが¹²、『純粹理性批判』と『思弁哲学』には、明らかな問題意識の共有が確認できる¹³。

本稿では、テーテンスの『思弁哲学』をテキストとして、テーテンスの「超越的哲学」構想が、『純粹理性批判』にどのような影響を与えたのか、について考察する。まず、考案の糸口として、草稿、書簡、覚書のなかで、カントがテーテンスに言及している箇所を集めて、その内容を確認する (I)。次いで、『思弁哲学』の内容を、「超越的哲学」に焦点を絞りつつ、概観する (II)。最後に、これらを踏まえて、改めてテーテンスとカントの関係について考察をする (III)。

I カントのテーテンスに対するコメント

カント全集に収録されているもののなかで、カントがテーテンスに言及しているのは、5つの書簡、2つの覚書、そして『プロレゴメナ』準備草稿においてであり、計8か所ある。年代順に、それぞれ内容を確認してみよう。

年代的に最もはやく表れるのは、1774年のロイシュ宛て書簡である (cf. X168f.)¹⁴。これはロイシュにテーテンスの著作を送る際の添え書きである。ここにはテーテンスの著作への直接的な言及はないが、『思弁哲学』、『試論』の出版以前からカントがテーテンスに注目していたことが知られ、興味深い。

年代的には二番目に早い1778年のヘルツ宛書簡では、後に『純粹理性批判』として出版される著作の作業進度が話題となるが、カントは、著作の構成に気を配るために時間が必要であるということとを述べる際に、他山の石としてテーテンスの『試論』に言及する。

「テーテンスは人間の自然本性についての大部の著作で鋭いことをたくさん述べましたが、彼は自分が書いたとおりにその本を印刷させてしまったのであり、少なくともそのままにしておいたにちがひありません。第二巻で自由について長い試論を書いたとき、不確かな輪郭線で描いたいくつかの観念を介するならば、この迷宮から首尾よく抜け出すことになるだろうとたえず希望していたように思われます。そして自分と読者とを疲労困憊させた後も、事柄はやはり彼が見出した通りの姿でそこにあるままでした。そこで彼は読者に、読者自身の感覚を問いただすようにと助言しているのです。」(X232)

ほぼ同時期 (アディケスによれば、1776-1778年) に書かれたと推定される覚書のなかには、テーテンスと自分を明確に区別しようとする意図が見出される。

「私はテーテンスのように、概念の展開 Evolution (それによって概念が生み出される全ての活動) に従事するのでもないし、ランベルトのように [概念の] 分析に従事するのでもない。そうではなく、私はただ、概念の客観的妥当性に従事する。私はこの二人の人物とは競合しない。」(Ref.4900, XVIII 23)

「テーテンスは純粹理性の概念をたんに主観的に探究した (人間本性)、私は客観的に探究する。テーテンスの分析は経験的であり、私の分析は超越論的である。」(Ref.4901, XVIII 23)

この時期の覚書には全て批判的なコメントが含まれているが、『純粹理性批判』出版後の書簡、草稿では、テーテンスに協力を期待する言葉や、テーテンスとの立場の近さを示唆する言葉がみられる。カントのテーテンスに対する態度において、支持から批判へと転じるといった展開を認めることはできない。むしろつねに重なりとズレとが同時に意識されていたといえるだろう。

1781~1783年の間に書かれた三つの書簡でテーテンスが登場する文脈は、ほぼ同じといってよい。カントは『純粹理性批判』第一版の出版時、そして少なくとも『プロレゴメナ』の出版時までは、協力者とともに新しい形而上学を構築する、という構想を抱いていた。『純粹理性批判』で展開される「批判 (Kritik)」は、新しい「形而上学」のための「準備学 (Propädeutik)」(A841/B869) として位置づけられているが、この新しい「形而上学」は、「批判」の成果を踏まえるならば、容易に完成される (cf. A XIXf., A XXI)。そして、「形而上学」の完成は、カント個人の課題というよりは、

何人かの協力者とともに遂行されるべき課題である（『プロレゴメナ』ではカントは、協力者と共に完成される体系は、自分自身の体系というべきではないとさえ言っている）（cf.IV 382）。しかし、この計画が実現することはなかった。例えば、1781年のヘルツ宛て書簡では、「メンデルスゾーン氏が私の本を脇に置いてしまったこと」への失望が語られ、さらに、「彼[メンデルスゾーン]とテーテンス氏、そして価値あるあなた[ヘルツ]を、あらゆる人の中で最も期待していた」と述べられている（X270）。

同様の趣旨で、1783年のガルヴェ宛て書簡では、「ガルヴェ、メンデルスゾーン、テーテンス」（X341）、同年のメンデルスゾーン宛て書簡では、「メンデルスゾーン、ガルヴェ、テーテンス」（X346）が、『純粹理性批判』に反応を示さないことをカントは憂えている。ここでカントが自らの計画の協力者として想定している哲学者は5人だが、手紙の宛先にかかわらず、常にリストアップされているのがテーテンスである¹⁵。

最後に、『プロレゴメナ』準備草稿の中の一文を見てみよう。この部分に登場する「評者」とは、いわゆる「ガルヴェ・フェーダー書評」（1782年1月掲載）の執筆者のことである。それゆえ、執筆は1782年から『プロレゴメナ』が出版される1783年の春までの間であると推定される。カントは書評に対するコメントの中で、テーテンスの立場と自分の立場と近づけて理解している。

「それゆえ評者は、けっしてこのようなア・プリオリな認識の可能性について——テーテンス氏が彼に機縁を与えることができたであろうにもかかわらず——熟考しなかったのである。」（XXIII 57）

以上のカントによるテーテンスへの言及は、（1）テーテンスに対する批判（著作の構成と、考察の手法に関するもの）、（2）カントの新しい形而上学構想への参与の期待、（3）ア・プリオリな認識の可能性を熟考するための機縁としての位置づけ、という三種類に区別することができるが、とくに（2）、（3）に関して二つの疑問が生じてくる。カントによれば形而上学とは、「経験が教えるものを全面的に見下し、しかもそれを（数学のように概念を直観に適用するのではなく）単なる概念によって見下し、それゆえそこでは理性自身が、自らの生徒になるべき、一つの完全に孤立した思弁的理性認識」（BXIV）である。経験主義の立場をとるテーテンスに、なぜカントが、自身の形而上学構想への参与を期待しうのか。そして、なぜテーテンスが「ア・プリオリな認識の可能性について」熟考する「機縁を与えることが」できる、とカントは考えたのだろうか。

II 『思弁哲学』概観

『思弁哲学』は、これらの問いについて考えるための恰好の資料である。『試論』においては、その表題（『人間本性と其の展開についての哲学的試論』）からも明らかなように、心理学的な関心が支配的であり、形而上学の問題は背景に退いているが、『思弁哲学』において、人間知性の心理学的分析は、形而上学の基礎概念を整備するために行われる手段であって、それ自体が目的ではない¹⁶。『思弁哲学』をテキストとすることで、形而上学構想をめぐるカントとテーテンスの関係が、よりはっきりと見えてくるはずである。ただし『思弁哲学』は原書で94頁の小著であり、全体の内容も、形而上学的な考察そのものというよりは、形而上学に関するプログラムといった性格が強い。それゆえ本稿も、形而上学の具体的な内容について踏み込んではいない。

1 『思弁哲学』と『試論』

最初に、『思弁哲学』(1775)と『試論』(1777)とがどのような関係にあるのか確認しておこう。ベックは、この二つの著作間に、テーテンスの立場の変化を認めている。すなわち『思弁哲学』では、カントの超越論的哲学と同様の方向性に進みうる着手点を据えたにもかかわらず、『試論』では、「ロックからの伝統に倣す発生的、経験的心理学の継承」へと思索を展開していった、というわけである¹⁷。たしかに、取り扱われる個々の問題に関して立場の変化が認められるが¹⁸、テーテンズ自身が、二つの著作を連続的なものと考えていることは、『思弁哲学』の序文から理解することができる。

「最初、この試論は、観察哲学に属し、人間本性の最も顕著な根本的特徴のいくつか、つまり、感覚と思考の原理、自発性と自由、そして人間の魂の本性とその完全性及び展開を取り扱う、多数の試論を集録したものの最初の試論として位置づけられていた。知性の一側面についての考察として、当該の論考が、その他の試論の間に居場所を見出し、他のいくつかの試論への注意を促す、という可能性もあった。しかし時がたつにつれて、当該の論考と、知性のより広い部分との内在的關係が浮かび上がってきたため、当該の論考を独立させ、先行的に刊行させる運びとなったのである。」(S.2)

また、1777年に「キール文芸新聞」に寄せられた『試論』の書評(ユーベレによれば、評者はテーテンスの同僚のエーラース(Ehlers))では、「数年来、著者が人間知性、活動的根本能力、自由、魂の本性とその展開について行っていた探究を公にした」¹⁹と述べられている。この証言は『試論』が『思弁哲学』以降に書き下ろされたのではなく、一連の探究の過程から、二つの著作が刊行されたということを裏づけている。

以上の根拠に基づいて、本稿では『思弁哲学』を『試論』によって放棄された立場のもとで書かれた書物とはみなさない。両者の論述の齟齬をどのように考えるか、という問題はやはりこのころが、本稿では、『試論』と『思弁哲学』とを一つの哲学のプログラムを構成するものとして理解する。

2 『思弁哲学』の狙い

テーテンズはこの著作のエピグラムとして、キケロー『トゥスクルム荘対談集』の第二巻から、次の言葉を引いている。

「もし誰かが〔哲学〕全般を批判したいと思えば、大衆を味方につけてそうすることができるだろう(Si quis universam velit vituperare, secundo id populo facere posset.)」²⁰

この言葉の前には、「…哲学は少数の審判者だけで満足し、大衆を故意に忌避し、逆に大衆からは疑念と嫌悪的になっている…」という哲学についての現状分析がある。キケローはこういった世論に抗して、「いかにして苦痛を克服するか」というテーマで哲学の弁護を行う。

テーテンズの意図も、キケローのそれに重ね合わせて理解することができる。ただしテーテンズの場合、「哲学」に相当するのは形而上学である。当時の形而上学をめぐる思潮について、テーテンズは「かつて諸学の女王であったこの学について、身分に関する審理(quaestio status)を請求することが、流行となっている…(...es die Mode mit sich bringet, dieser Wissenschaft, weiland Königin der Wissenschaften, jetzo quaestionem status zu machen.)」(S.22)と述べる²¹。こういった思潮に抗して、テーテンズが試みるのは「人間の知識の本性に基づいて、一般思弁哲学に至るきっかけ、その成立、

一般思弁哲学における理性の歩み、そこにおける最終目的、その利点と相対的な不可欠性、一般思弁哲学と通常の間知性との関連、その欠陥と要求、その根本概念と原則の補正の仕方、及び、この学と観察哲学との関連を提示すること」(S.1)である²²。

テーテンスが「一般思弁哲学 (die allgemeine speculativische Philosophie)」ということでは理解しているのは、形而上学の一般的な部門(ヴォルフでいうところの「存在論 (Ontologie)」)である。思弁哲学は「形而上学」と換言されうるものであり (cf.S.23)、その一般的な部門は、物質的なものと、非物質的なものと同じように適用される概念および原則(たとえば、「物とその性状」、「実体」、「原因」、「必然性」など)を取り扱い、それらの源泉や実在性について考察することを使命とする (cf. S.23, S.15)。また「通常の知性の優れた反省」との関係では、思弁哲学は「展開された (entwickelt)、すなわち秩序化され、相互に関連付けられ、誤った付随的な観念の全てを洗い流して浄化され、拡張され、高められ、さらに確固たるものとされた理性知識」と特徴づけられる (S.17)。つまり、思弁哲学は「通常の知性」の営みを放棄するものではない。

テーテンスは、「哲学がここ数年、私たちの間でなしてきた、そしてまたさらになすように思われる転換 (Wendung)」に鑑みて、この著作の試みがまさに時宜を得ている、という。この「転換」においては、当時、形而上学の方法について新機軸を打ち出そうとしていたランベルト(1771年に『建築術構想』²³を出版)やカント(1770年に『可感界と可知界の形式と原理』を出版)のことが念頭に置かれていると考えられる²⁴。以下でも取り上げるように、実際『思弁哲学』においてテーテンスは、ランベルトやカントを高く評価しており、彼らのアイデアを取り入れて自分の哲学を彫琢している。

3 『思弁哲学』におけるテーテンスの立場

ここで、テーテンスが『思弁哲学』においてとっている立場を確認しておこう。テーテンスの立場は、端的にいうと経験主義であり、「一般概念はすべて、感覚にその根源を有する。それゆえ前者を、後者へと還元しなければならない、すなわち、思考能力が一般概念を引き出す際の、その出所である感覚を探し出さなければならない。」という経験主義の指針の正しさを確認している、と明言している (S.48)。

ただしテーテンスは「思考能力が感覚を、客観についての表象へと加工する仕方 (die Art und Weise, wie die Denkkraft die Empfindungen zu Vorstellungen von Objecten verarbeitet)」(S.50)を考慮しないかぎり、実在的な概念と、そうでない概念を区別できないとして、この指針の不十分さも指摘する。この「思考能力 (Denkkraft)」のステータスはどのように考えられているのだろうか。テーテンスは「思考能力」の位置づけについても、経験主義を徹底する。

「思考すること (Denken) の概念、そして知性の概念の起源であるわれわれの思考活動、思考の仕方についての感情 (die Gefühle von unsern Denkhätigkeiten und Denkart) も、内的な感覚に属している。だから、「前もって感覚のうちになかったものは、知性のうちにはない (nil est in intellectu, quod non ante fuerit in sensu)」という命題にライブニッツがつけ加えてもらいたがっていた「知性をのぞいては (Excepto intellectu.)」(『人間知性新論』L.2, C.1. §.2.) という制限は不要である。」(S.54 Anm.)

このように、思考能力や思考活動も、それを観察する限りにおいてわれわれの視野に入ってくるという点で、経験的であるとみなされる。また、テーテンスは「人間知性、人間の思考様式、その概念および概念の生成の仕方」についての考察もある種の「観察」とみなす (cf. S.6, S.72)。例えば、テーテンスは、形而上学の原理を形式的なものを実質的なものに分け、前者を「われわれが判断す

る際の、概念の結合の仕方」を表明する「理性の一般原則」²⁵として位置づけている (cf.36f., たとえば「無からは何も生じない」という命題)。そして、この原則が観察によって確保される限りにおいて、それは「経験命題 (Erfahrungssatz)」(S.36)であるとされる。

しかしテーテンス自身の位置づけではなく、その実質に関して言えば、この「観察」の手続きは、カントの認識批判の方法にかなり接近している。例えば『純粹理性批判』の「誤謬推理」章 (A341ff./B399ff.) の導入部における「統覚」についての説明を読むと、このことがよく分かる。「誤謬推理」章の導入部の狙いは、カント自身が考える合理的心理学批判のポイントを明確化するために、さしあたって想定される合理的心理学に対する疑念を、合理的心理学者に代わって払拭することにある。この疑念の一つは、合理的心理学が依拠する唯一のテキスト「私は考える (Ich denke)」が、一種の「内的経験」あるいは「自己知覚」(私が私に関わる、という構造)を前提にしている点に、「経験」の混入を批判する余地があるのではないか、というものである。カントは「内的経験」や「知覚」は、統覚が問題となる場合、すなわち、特定の知覚的要素が捨象されている場合には、「内的経験一般」や「知覚一般」(傍点部筆者)という非経験的なものとして理解しようとして、この疑念を取り除いている (cf.A342f./B400f.)。この説明は、テーテンスが「観察」と呼ぶ手続きを非経験的なものとして理解する可能性を示唆するものとして、読むことができる。

4 形而上学の不可避性について

では『思弁哲学』の本論の概観に進もう。『思弁哲学』の最初の問題は、人間は一般思弁哲学なしでやっていけるのかどうか、というものである。テーテンスはまず、通常の間知性の営みに目を向ける。ここで前提となるのは、「われわれは知性 (Verstand) の外側にある対象について、われわれ自身の内に取り集められた表象を介する、という仕方以外ではなにも知ることがない」(S.5)ということである。この前提のもとで、表象を介して対象に向かうか、表象そのものに向かうか、という二つの表象への関わり方が区別される。通常、人間知性は前者の関わり方をとるが、たとえば表象間で不整合が生じた場合には、表象自体の仕組みに焦点が絞られて、後者への移行が生じる。この二つの関わり方を学的に規定すると、前者が「客観の哲学 (die Philosophie von den Objekten)」、後者は、「表象の観察 (Beobachtung der Vorstellungen)」あるいは「知性の自然学 (die Physic des Vestandes)」である。しかし、一時的にこういった移行が起こったとしても、人間知性には、こういった不整合を補正する仕組みがあり、「知性の自然学」に意識的に取り組む道は断たれてしまう。すなわち、(1) 観念相互を比較して、観念相互の調和に注意を払い、(2) この調和の中で、確実に、持続的な観念をより分け、(3) これを基準として、不整合を引き起こした諸観念の真偽を判定する、という「反省」の仕組みである (cf. S.5ff.)。

他方、通常の間知性は、学問的な探求において、知性の共通概念や原則を使用している。例えば、自然学者、医学者、法学者、歴史家等々は、「原因と結果、能動と受動、物とその性状、必然と偶然、秩序、時間と空間」といった概念が用いる。しかし、それらの本性が何であるか、といったことを気にかけることはない (cf. S.12ff.)。

また「神、人間の魂、世界、創造者と被造物との関係」のうち、一般思弁哲学に踏み込まずとも、到達できる知識もある。テーテンスは、「リード、ホーム、ビーティ、オズワルド」という哲学者の名を挙げ、彼らが一般思弁哲学なしで、ある種の形而上学を展開していると述べる。彼らは、経験主義の立場に依拠しつつ、先入見から出来る限り解放されている「健全な人間知性」に、真かつ正確なものとして提示されるものを真理として受け取り、「確実な理性知識のリスト」にそれを組み込んでいく。しかしこの場合、「知性の本性、第一の基礎概念と原理の源泉、実在性についてのより深い考察」へと踏み込んでいくことはない (cf. S.13ff.)。

では、いったいどのような仕方一般思弁哲学の不可避性が裏付けられうるのだろうか。テーテンスは、考察の主題が感官に現前するものを超えている場合、やはり一般思弁の哲学が必要になると述べる。観察への依存度が低くなればなるほど、存在者一般に関する共通概念を頼りに推論を展開していくほかはない。依拠すべきものがそれしかない以上、「通常の知性の優れた反省」(上述の、リード、ホーム、ピーティ、オズワルドが行っているような探究)よりも、「展開された(entwickelt)」理性知識が必要になる。こういった「形而上学的な諸対象」を考察する必然性はどこにあるのか。ここでテーテンスは「探し求める理性」の欲求をその根拠とする。

「[これらの形而上学的な諸対象は、]その大部分が、地球から最も離れたところにある恒星のように、われわれの観察の範囲をはるかに超えて存している対象ばかりである。だが、それにもかかわらず、探し求める理性(die nachforschende Vernunft)は、これらについて何かを知りたがる。」(S.19)²⁶

しかし、探し求める理性の欲求に、形而上学的な諸対象を考察する不可避性が根拠づけられるとはいえ、形而上学はやはり困難な学問である。その困難さをテーテンスは航海のメタファーで語る。

「形而上学は海をこえて世界をめぐる旅である。そこで航海者は、いくつかの一般的な経験命題をたよりにして、とるべき進路を教えるすこしばかりの島や岸にそこそこで出会うが、その数はきわめて少ない。諸々の情熱は嵐であり、先入見は、理性を押し戻すか、座礁させる岩礁である。」(S.20)²⁷

一般思弁哲学の必要性は、形而上学的対象の探究との関連で裏付けられるが、形而上学には上述のような特異性、ないしは困難がある。とするのなら、形而上学で使用される概念や原則がそもそも妥当なものなのかどうか、ということが問題となってくる。すなわち、「…洞察と確信が意見と得心に対して関わるような仕方通常知性の哲学に関わる明証的な形而上学は、人間にとって可能な学であるのか。それは実際に、われわれの知性に定められた制限の内部に存するののか」(cf. S.22)ということが問われねばならない。

5 テーテンスの「超越的哲学」

この問いについて、テーテンスは、「…この問いにいかなる答えが与えられるべきかは、この問いが、基礎学(Grundwissenschaft)によってどのように理解され、どのように答えられうるか、にかかっている」(S. 22)と述べている。要するに、形而上学の可能性の問題が、その基礎的部分の可能性の問題に収斂する、ということである。テーテンスによれば、形而上学とは「さまざまな学の集合」であり、その基礎に位置するのが、「一般超越的哲学(die allgemeine transzendente Philosophie)、基礎学、存在論(Ontologie)」である(テーテンスは、「形而上学」と「思弁哲学」を互換性のある概念として捉えているので(S.23)、上記の三つの概念は、「一般思弁哲学」と代替可能な概念といえる。また「一般超越的哲学」と「超越的哲学」という二つの概念は、区別されずに用いられている(cf. S.24f.)。これを共通の幹として、「魂と精神と神」をその対象とする「知性的-哲学(Intellectual-Philosophie)」と、物体的事物とその諸性状に関わる(大部分は自然学と数学)「物体的なもの哲学(Philosophie des Körperlichen)」「物体の自然学(Physic der Körper)」の二つの学がある。超越的哲学は、これら二つの学が扱う概念や原則に比して「より高次の、より一般的な原則のみに

関わる」とされるが、両者からは区別される「それ自体固有の学 (eine eigne Wissenschaft für sich)」(S. 23) である。それは、「現実的に存在している客観」には関わらず、「ただあらゆる種類の物一般において可能的あるいは必然的であるもの (was möglich oder nothwendig ist bey allen Arten von Dingen überhaupt) だけを取り扱う」(S.24)²⁸。このように形而上学の全体が、構造的に超越的哲学に依存しているので、「超越的哲学の実在性」が確立されるか否かに、「形而上学全体の実在性」がかかっている (S.25)、ということになる。

以上の論の展開をまとめると、一般思弁哲学の必要性は、形而上学的探究の不可避性によって基礎づけられるが、そこで問題は、形而上学が可能であるかどうか、というところへ差し戻される。そしてこの可能性は、形而上学の基礎部門である一般思弁哲学 (= 超越的哲学) の可能性にかかっている、ということになる。

ところで、テーテンスはなぜ伝統的に「存在論」と呼ばれる学問領域を、「超越的哲学」と呼ぶのだろうか。このことを考えるために、まず「超越的 (transcendent)」概念の由来に目を向けてみよう。

すでに述べたように、transcendental と transcendent は『純粹理性批判』以前、互換性のある概念だった。これは、ラテン語 transcendentalis の独訳であるが、transcendentalis は、中世のスコラ哲学において広くいきわたっていた術語であり、17世紀のドイツ・アリストテレス主義にも定着していた。17世紀のドイツ・アリストテレス主義において、transcendentalis には大きく分けて、二つの用法がある。第一に「超自然的」という意味で用いられており、第二に、カテゴリーに帰属しない、一般的な主要概念 (たとえば、ens, unum, verum, bonum 等) を特徴づけるために用いられている。18世紀ドイツでは、この語の用法はあまり見られないが、ヴォルフやバウムガルテンでも確認はできる²⁹。例えば、バウムガルテンは、unum, verum, perfectio, bonum に transcendentalis/ transcendentaliter を関連づけている³⁰。ここで「超越論的な一なるもの (unus transcendentalis)」は、「本質的に一なるもの (wesentlich eins)」と独訳され (§ 73)、「超越論的真理 (veritas transcendentalis)」は「必然的形而上学的真理 (die notwendige metaphysische Wahrheit)」と独訳されている (§ 89)。

こういったバウムガルテンの用法に抗して、新たに transcendentalis/transcendental/transcendent の概念を捉えなおしたのが、ランベルトである。ランベルトは、『建築術構想』において、transcendent という語の本来の意味に即して、「ある概念が、その対象を超えて、まったく別種の対象へと移される場合に」、「その概念を超越的 (transcendent) と呼ぶことができる」と述べる。たとえば物体界の概念が、知性界へと適用されたり、あるいは逆に知性界の概念が物体界に適用されたりする場合に、その概念が「超越的」と呼ばれる、とする³¹。このことを根拠として、「物体界にも、知性界にも適応される」概念が、「超越的」である³²。たとえば、「力」、「現実存在」、「持続」、「統一」、「量」が超越的概念に該当する³³。

テーテンスが「超越的哲学」という概念を用いる時に依拠しているのは、明らかにランベルトの用法であるが³⁴、ランベルトとテーテンスでは、強調点のおき方が異なる。ランベルトの場合、「超越的」という語に本来彼が託した意味は、〈対象領域を越境しうる〉というものである。一方テーテンスは、「超越的」という語を、独自の領域を構成する学を特徴づけるために用いている。「領域」の問題が焦点化されていることは、たとえば次の箇所から理解できる。

「熟慮する者が単に自分自身が専門とする領域 (Feld) についてだけ知見を得ようとするのではなく、人間知性が明らかにできている限りまで、知性的な世界の別の部分に対する自身の専門領域の位置を見やり、両者の関係を吟味しようとするならば、彼の目的が、彼が、ほかならぬ超越的哲学 (die transcendente Philosophie) の領野 (Region) に位置する、より高い場所 (Standort) に立つことを要求する。」(S.13、傍点は筆者による。)

要するに、知性的なもの、物的なもの、超越的なもの、という「共通概念の三つのクラス」(S.53)を明確に区別するためにテーテンスは「超越的」という概念を利用している、ということである。「超越的哲学」は「存在論」の言い換えであるが、存在論を含め、従来、この学に与えられていた名称（「基礎学 (Grundwissenschaft)」、「第一哲学 (philosophia prima)」、「一般形而上学 (metaphysica universalis)」は、区別の問題を語るには必ずしも適切ではない。これらの概念では、存在論とそれ以外の形而上学の部門が、〈一般と特殊〉、あるいは〈基礎と基礎づけられたもの〉という階層関係の下で理解されるのであって、これでは、それぞれの領域の区別を際立たせることはできない。こういった意図のもとでテーテンスは「存在論」を「超越的哲学」と言い換えている、と考えることができる³⁵。

6 超越的哲学の实在性について

なぜこういった区別が必要なのだろうか。これは超越的哲学における概念、原則の实在性の問題との関わりで説明することができる。以下、实在性の概念、实在性確保の手続き（「实在化」）について簡単に説明した後で、領域の区別の問題と实在性との関係について考察する。

すでに述べたように、テーテンスの理解によれば、形而上学全体の存亡は、超越的哲学の实在性が確保されるかどうかにかかっている。テーテンスによれば、「实在性 (Realität)」は、概念ないしは原則において「主観的でしかないもの、われわれ自身の思考能力がその中へと持ち込むものすべてを、現実的に客観的なもの、知性の外側の事象に合致するものから注意深く分離」することによって確保される (S.27)。概念や原則があたかも「純粋な空気 (eine reine Luft)」(S.27) のようになったところで、対象のありのままの姿がわれわれに届けられる。ここに概念や原則の实在性があるとされる。

では概念や原則の实在性は、具体的にどのように確保されるのか。テーテンスはこの作業を「实在化 (Realisierung)」と呼び、实在化されるべきものを二つの種類に分けている。

一つ目は、II-3でもとりあげた、「論理的、形式的原理」で、「われわれが判断する際の、概念の結合の仕方」を表明する「理性の一般原則」(cf. S.36f.) が該当する。この場合の「实在化」とは、こういった理性の一般原則が普遍性を有するのかどうか、ということに決着をつけることにある。テーテンスは、論理的・形式的原理の实在化の方法として、われわれの判断の仕方を観察し、経験に基づく限りでの普遍性を証明する、というやり方と、矛盾律からの導出という「形而上学者たち」の手続きを吟味するが、後者については「不可能であると断言せざるをえない」(S.42) と述べている。

二つ目の「实在化」の対象は、「質料的原則」あるいは「第二のクラスの原則」であり、「超越的哲学を構成するきわめて多くの原則」がここに位置付けられる (S.44)。これらの原則は、「形式あるいは結合の仕方」に関しては、「論理的、形式的原理」において表現されているか、そのうちに根拠を有するものであり、その固有性は、主語と述語の位置に置かれる概念によって決まる。それゆえ、この種の原則の实在化は、主語と述語の位置に置かれる概念の实在化を意味する。

「質料的な原則」において問題となる「概念の实在化」とは、具体的にどのような作業なのだろうか。それは、素材としての感覚から概念がどのように成立してくるのか、その過程を見定めることにある。経験主義のテーゼ「われわれの概念は感覚から生じる」(S.49) は、それだけでは未規定な主張にすぎない。概念の实在性が問題となる場合には、その素材を識別するだけでは十分ではない。例えば、夢も、「われわれの最も真なる思想 (unsre wahren Gedanken)」も、感覚を素材とすることには変わりがない。それゆえ、思考能力が関与して、「それによって素材が変容され、合成され、混合される、加工の仕方 (die Art der Verarbeitung)」(S.50) をも見定めなければならない。こ

の加工の仕方(言い換えると「抽象 (Abstraction)」の仕方)の違いによって、表象の種類が区別され、実在的であるかどうか判定されることになる³⁶。

そして、この概念の実在化が、特に領域の区別の問題と関わっている。超越的哲学の概念(「超越的概念 (transcendente Begriffe)」(S.51))の実在性を保証するためには、「単に形象的 (bildlich) な、想像 (Phantasie) によって付け加えられた概念」(S.48)の混入だけでなく、「知性的-哲学」や「物的なもの哲学」で扱うべき概念の領域侵犯を遠ざけておかなければならない。

「もし哲学者たちが、一般的な知性概念におけるこの要求〔超越的なものとそれ以外の一般的なものを区別すること〕に関してだけでも、事柄の本性とその意図が要求することを成し遂げていたら、実在化の要件のうちの重要なこと、本質的なことが成立していたことだろう。もし超越的なものが、一般的ではあるが、外的感覚に起源をもつものや、非物質的でしかないものから適切に分離されていたら、われわれは、われわれの一般原則〔sc. 超越的哲学の原則〕として何を持ち、何を持たないかが分かっているだろう。」(S.60f.)

概念の実在化と対象領域の区別の問題を関係づける手法は、カントの『可感界と可知界の形式と原理』(1770年)から受け継がれたものである。カントは『可感界と可知界の形式と原理』の第五章において、「知性的なもの」と「感性的なもの」の置換を「すり替えの誤謬 (vitium subreptionis)」(II 412)と呼んで、これを防止することが「形而上学の奥義を究めようとする人々にとって」きわめて重要であると述べている (II 419)。テーテンスはこのカントの指摘を高く評価している。

「もしかすると、カント氏の知性概念の起源についての考え方、およびそこで用いられる表現も、多くの人たちにとって、当該の事柄についてのカントの考察が、形而上学的な屁理屈を含んでいる、と考えるきっかけなのかもしれないが、そういった罪は彼に帰されるべきではない。というのもカントの考察が狙っているのは、それを混同したために、思弁哲学において多くの曖昧さと混乱が引き起こされてきた事柄を実在的に、しかも実りある仕方と区別することなのだから。」(S.55Anm.)

テーテンスが『可感界と可知界の形式と原理』を正しく理解していたかといえば、それは疑わしいが (cf. S.28Anm, S.54Anm.)、彼が上述の「知性的なもの」と「感性的なもの」との区別が形而上学の急所である、というカントの主張に賛同していることは明らかである。とすれば、テーテンスが「存在論」の代替概念として「超越的哲学」を採用する問題意識の淵源は、『可感界と可知界の形式と原理』にある、ということが出来る。

7 形而上学における「分析」と「総合」

以上のように、テーテンスは、形而上学における概念の実在性を確保するためには、あらかじめ、概念の形成過程における知性の関与の仕方を吟味しなければならない、と主張する。こういった発想は、「形而上学」の「準備学」として、「知性的認識と感性的認識の区別を教える学問」の必要性を説く『可感界と可知界の形式と原理』のそれと重なるが、テーテンスは「観察哲学」に依拠する立場を明確に打ち出すことによって、カント起源の考え方に独自の色彩を加えている。

「超越的哲学、あるいは基礎学は、まず人間知性とその思考の仕方、人間知性の概念とその成立の仕方に関わる観察哲学の一部として取り扱われなければならない。そうすることによってはじめ

て、この学は、知性の外部に存する諸対象についての一般的な理性の学になりうる。」(S.72)

また、テーテンスは『思弁哲学』の最終章において、1763年にベルリン・アカデミーが提示した懸賞論文の課題（「形而上学の真理一般が、とりわけ自然神学と道徳の第一の諸原則が、幾何学の真理と同じ判明な証明をもちうるか否か。…」）を念頭においた論述を展開しているが、そこで超越的哲学と観察哲学の関係を、「分析」と「総合」という概念を用いて説明している。

「前もって、基礎学（Gründelehre）が人間知性の自然学として取り扱われ、その実在的な概念と原理とが観察に基づいて見出され、集められているようにしておくように——これが、分析的方法であり、これに基づいて、ロック、ヒューム、コンディヤック、その他、ドイツの哲学者たちのうちの幾人かが考察を行っている——。そうすれば、そのときには、もはや仕事のうちの一方は、もちろんそれが最も重要で最も困難なものなのだが、やり遂げられているということ、そしてもう一方の仕事が、一般的な諸根拠に基づく思弁のためになお残されている、ということが明らかとなる。」(S.85f.)

テーテンスによれば、思弁哲学は幾何学と同様の明証性を最初から持つことはできず、観察哲学の方法に基づく「分析」を前提として、はじめて実在的な一般概念を手にすることができる。一般概念が手に入れられた後では、幾何学の方法をモデルとした「一般概念に基づく総合的思弁（die synthetische Speculationen aus allgemeinen Begriffen）」(S.84)を展開することができる³⁷。このあたりの論述は、カントの『自然神学と道徳の判明性』（1764年）の第一考察、第一節の表題「数学はそのすべての定義へ総合的に達するが、哲学は分析的に達する」（II 276）を想起させる。学における「分析」と「総合」の区別は、『純粹理性批判』において、「批判」と「形而上学」との区別の下敷きとなっていると考えられ³⁸、前批判期から批判期に至るまで、カントの「哲学」理解を貫いている枠組みである。この点も、カントとテーテンスの関係を考えるための一つの軸として考慮すべきであろう。

III 『純粹理性批判』と『思弁哲学』

カントはテーテンスの「超越的哲学」の構想をどのように受け取ったのだろうか。以下では、『純粹理性批判』第一版（1781）をテキストとして、カントがテーテンスの「超越的哲学」をどのように継承し、そして変貌させたのか、考察する。

1 「超越論的」の定義

『純粹理性批判』において「超越論的」という概念が初めて登場するのは、「序論（Einleitung）」の、当の概念が定義される箇所である。その定義の内容は次のとおりである。

「私は対象に関わるというよりはむしろ、対象一般についてのわれわれの概念に関わる一切の認識を超越論的と呼ぶ（Ich nenne alle Erkenntnis transscendental, die sich nicht so wohl mit Gegenständen, sondern mit unseren Begriffe von Gegenständen überhaupt beschäftigt.）そのような概念の体系は、超越論的哲学（Transscendental-Philosophie）と呼ばれるだろう。」(A11f.)

「超越論的（transcendental）」と「超越的（transcendent）」とが互換可能だとみなす当時の読者には、この定義は、ほとんどの部分がテーテンスの踏襲と見えたのではないだろうか。既に見たように、

テーテンスにおいて「超越的哲学」は、「現実的に存在している客観には関わらず、ただあらゆる種類の物一般において可能的あるいは必然的であるものだけを取り扱う (...beschäftigt sich nur mit dem, was möglich oder nothwendig ist bey allen Arten von Dingen überhaupt)」(S.24) 学であり、この学の原則における主語、述語の位置に置かれるものが、「超越的概念 (transcendente Begriffe)」(S.51) である。「対象一般」と「物一般」との違いこそあれ、両者とも、対象領域に関して同じ規定(すなわちヴォルフにおける「存在論」の対象領域)を与えている。たしかにカントは、超越論的な認識が、対象ではなく、「対象一般についてのわれわれの概念」に関わると述べている点で、先に引いたテーテンスの「超越的哲学」の定義から逸脱しているとも言えるが、テーテンスは別の箇所で「超越的哲学、あるいは基礎学は、まず人間知性とその思考の仕方、人間知性の概念とその成立の仕方に関わる観察哲学の一部として取り扱われなければならない」(S.72、本稿Ⅱ-7参照)、と述べていたことを考慮すれば、そういったことを織り込んだ定義として読むこともできる。

2 『純粹理性批判』における「区別」の問題

トネリによれば、カントが「超越論的」という語を、『純粹理性批判』での用法に近い意味で用いるようになったのは、1776年(『思弁哲学』出版の1年後)からである。トネリは、この語が、17世紀のドイツ・アリストテレス主義のなかで広く浸透していたが、ドイツ講壇哲学においては、それほど重要なものではなかったことを確認したうえで、カントによる当の語の採用の理由を、「同時代の哲学者たちの学説と混同されるという危険」を回避しつつ、「新しい内容で満たされた術語が、読者の耳に奇異なものとして響かないようにするため、と説明している³⁹。しかし、テーテンスの「超越的哲学」構想をカントが踏まえていると考えるならば、カントが「超越論的」という語を採用したより具体的な理由が浮かび上がってくる。先取りしていえば、『純粹理性批判』においても領域の区別の問題が論の展開の軸の一つをなしており、そのために「超越論的」という語が採用されなければならないと考えられる。ただし『純粹理性批判』の区別の狙いは、『思弁哲学』のそれとは正反対である。以下、『純粹理性批判』をテキストとして、この解釈を裏付けていく。

カントの「超越論的」が、テーテンスの「超越的」から決定的に逸脱するのは、「感性論」を経た後である。カントは「感性論」の成果として、時間と空間をア・プリオリな直観形式として取り出した。直観形式はア・プリオリな総合判断の可能性を基礎づけるが、感官を通じて受容されたものにしか関わることができない。それゆえ「感性論」は、ア・プリオリな総合判断は感官の対象を超えて妥当しえない、ということも明らかにしている。カントは感性を独立の認識源泉として認めることによって、ア・プリオリな総合判断の条件の確保とその限界確定をおこなったわけだが、このことによって、「対象一般についてのわれわれの概念」(すなわち「純粹知性概念」)において、二つの使用の仕方が区別される。それが、「経験的使用 (der empirische Gebrauch)」と「超越論的使用 (der transcendentale Gebrauch)」である。カントの説明によれば、「経験的使用」とは「概念が単に諸現象に、すなわち可能的経験の諸対象にのみ関係づけられること」であり、「超越論的使用」とは「概念が物一般および物自体そのもの (Ding überhaupt und an sich selbst) に関係づけられること」(A238/B298) である。この用語法は『純粹理性批判』における他の「超越論的」の用例に照らすとイレギュラーであるが、「対象一般についてのわれわれの概念」(「純粹知性概念」)と「超越論的」との関係視野に収めておけば、奇異とは言えない。概念の「超越論的使用」とは、認識のための最も基礎的な制約そのもの、いわば裸の「純粹知性概念」であるが、感性的直観との関係が捨象されているために、それにはもはや認識の客観的妥当性は認められない。テーテンスの議論の枠組みに照らすと、概念の超越論的使用は「超越的概念」に対応するが、与えられるステータスはカントとテーテンスで大きく異なる。テーテンスが守るべきものは、超越的概念の「純粹性 (Reinigkeit)」(S.57) で

あるが、カントはむしろ、客観的妥当性がみとめられる認識の領域から、概念の超越論的使用を締め出すことを目指している。

カントはテーテンスとは別の意味で、概念の超越論的使用が関係する対象領域を、もう一つの対象領域と区別することの難しさを感じていた。概念の超越論的使用における条件は、認識の最も基礎的な条件である。それゆえ概念の経験的使用もこれに従わなければならない、後者が前者と齟齬をきたすことはありえない。それどころか認識能力の区別を度外視して、概念の超越論的使用の条件を基礎的な条件として位置づけた場合、経験的使用の条件は、単なる特殊条件とみなされ、その根源性が見落とされてしまう。カントは概念の超越論的使用の条件を「単なる概念 (der bloße Begriff)」と呼び、その脅威を次のように言い表している。

「…何らかの物の単なる概念のもとでは、いくつもの直観の必然的制約が捨象されている (von manchen notwendigen Bedingungen einer Anschauung abstrahirt worden) ので、特別な性急さによって、この捨象されるものがどこにも見出されないようにみなされ、物には、その概念に含まれているもの以外は何も認められない、ということになる」(A281/B337f.)。

それだけに概念の超越論的使用が経験に対して発言権を持ち得ないことを明確に示すという課題は特別の手続きを要する。カントは「超越論的分析論」の末尾に、特にこの課題に特化したパート(付録「反省概念の二義性について」)を置き、この区別の重要性に注意を促している⁴⁰。

カント固有の意味での「超越的 (transscendent)」は、概念の「超越論的使用」と「経験的使用」の区別を前提として導入される。純粋知性の諸原則は、経験の限界を超えて使用される場合、「超越論的使用」と呼ばれる。カントはこれとは区別して、経験の限界を踏み越えることを命ずるような原則(すなわち、純粋知性の諸原則の「超越論的使用」を促す原則)を「超越的 (transscendent)」と呼ぶ (cf. A296/B353f.)。この「超越的」の用法は、〈対象領域を越境しうる〉という意味をこの概念に与えたランベルトの用法に近い。

カントは、以上のような仕方でテーテンスの区別の枠組みを継承し、変貌させているが、このことと呼応して、カントの「超越論的哲学」も独特なものとなっている。カントは自然の形而上学(「狭義の形而上学」(A845/B873))の基礎部門として、「超越論的哲学」を位置づけているが、この学は「知性及び理性自身だけを、全ての概念と原則からなる一つの体系において考察するが、それらの概念と原則とは、与えられているかもしれない客観を想定することなしに、対象一般に関わる(存在論 *Ontologia*)」と定義される (A845/B873)。ここでカントは、超越論的哲学の概念および原則に関わる「対象一般 (Gegenstände überhaupt)」を、経験の限界内の対象に制限してはいない (cf. A845/B873)。つまり「弁証論」で主題化された「超越論的理念」も「対象一般」に包摂される。超越論的哲学における概念および原則は、「超越論的使用」と「経験的使用」の両方を射程に収めており、この点で、「超越的哲学」の全体が実在的であるべきだとするテーテンスとは立場を異にする。そして形而上学の基礎部門をこのように規定することと関連して、「体系的な連関をなす純粋理性からの、すべての(真の、ならびに見せかけの *wahre sowohl als scheinbare*) 哲学的認識」(A841/B869、傍点は筆者による)というカント固有の「形而上学」の定義が得られるのである。

おわりに

本稿では、テーテンスとカントの相互影響関係を「超越的哲学」/「超越論的哲学」という概念を軸に考察した。最後に I で提示した二つの問いに対して——すでに論述の中で答えは出ていると思

われるが、まとめの意味も込めて——これまでの考察から導き出される答えを示したい。問いは、なぜカントはテーテンスに自身の形而上学構想への参与を期待しうなのか、そして、なぜカントはテーテンスが「ア・プリオリな認識の可能性について」熟考する「機縁を与えることが」できると考えたのか、というものであった。

前者の問いに対しては、1770年～1781年までのカントの思索が、いわば対ヴォルフ形而上学の共同戦線に参加するなかで深められていったからである、と答えることができるだろう。例えば、本稿で取り上げた「超越的／超越論的」という概念についていえば、1781年の「超越論的哲学」構想の前提には、1770年のカントの「感性的認識と知性的認識の区別」の理論(1770年)、ランベルトの「超越的」概念に関する新機軸の提示(1771年)、両者をふまえたテーテンスの「超越的哲学」構想(1775年)という、思索の連なりがあったのである。ここでは、一般的には異なる立場に属すると考えられている哲学者たちの共同戦線が成立している。テーテンスははっきりと、この共同戦線への参加を表明しているが(cf. S.3)、カントも同様の意識を共有していたのではないか。これが正しいとするならば、カントが1781年の段階で、自らの形而上学構想へテーテンスの参与を期待するということは決して意外なことではない。書簡で披歴されるカントの期待と失望は、1770年以降の(著作を通じた)共同作業に対する感謝の裏返しともいえる。この視点から当該の三通の書簡に目を通すと、少しせつない気持ちにさせられるが、カントの期待が裏切られたことは、『純粹理性批判』が1770年代の共同戦線の枠組みには収まりきれない内容をもつことの証左であると言えるのかもしれない。

後者に関して言えば、これはおそらく認識の形式的原理に関するテーテンスの論述がカントの念頭にあったからである、といえるだろう。II-3でみたように、テーテンスは形而上学の原理を形式的なものと質料的なものを区別しており、前者を、「われわれが判断する際の、概念の結合の仕方」を表明する「理性の一般原則」として位置づけている。本稿でも指摘したように、テーテンスはこれを「経験的命題」と呼ぶが、発想自体はカントにおけるア・プリオリな原則の近くまで来ている。認識の形式的原理についての考察は、『試論』において大規模に展開されている。この点に関する両者の関係を詳らかにするためには、『試論』の徹底的な読解が必要になる。これについては稿を改めて取り組みたい。

(付記) 本研究は科学研究費補助金(課題番号24720014若手研究(B))の助成を受けたものである。

注

- 1 Karl Rosenkranz, *Geschichte der Kant'schen Philosophie (Immanuel Kant's Sämtliche Werke, herausgegeben von Karl Rosenkranz und Friedrich Wilhelm Schubert. 12.Theil)*, Leipzig 1840, S.65.
- 2 David B. Baker (ed.), *The Oxford Handbook of the History of Psychology*, Oxford 2011, p.260.
- 3 Jürgen Engfer, Einleitung, in: *Johann Nicolaus Tetens- Die philosophischen Werke*. Bd. III. Kleinere Schriften Teil1. In Zusammenarbeit mit Rüdiger Theile und Robert Mößgen ausgewählt, eingeleitet und herausgegeben von Jürgen Engfer, Hildesheim 2005, XVI.
- 4 この証拠としてしばしば引用されるは、ハーマンが1779年5月17日にヘルダーに宛てた書簡の以下の部分である。「カントはがんばって彼の純粹理性の道德 (seine Moral der (ges.) reinen Vernunft) に取り組んでおり、彼の前にはいつもテーテンスが広げられています。」*Johann Georg Hamann Briefwechsel*. Bd.4, 1778-1782, hrsg. von Arthur Henkel, Wiesbaden 1959, S.81.
- 5 本稿では、Einbildungskraftを想像力、Verstandを知性と訳する。この訳語にはカントの著作における慣例と外れており、読者に奇異な感じを与えるというデメリットがあるが、カントとそれ以外の哲学者との連続性

を可視化するという点でのメリットがそれを凌駕すると判断した。

- 6 Herman Jean de Vleeschauer, *L'evolution de la pensée kantienne, L'histoire d'une doctorin*, Paris 1939, pp.93-99.
- 7 Lewis White Beck, *Early German Philosophy*, Bristol 1969, pp.412-425.
- 8 活字を新たに組み直していないテーテンス著作集の綴りと整合性をつけるため、カントのドイツ語原文を引用する場合も、アカデミー版の綴りで表記する。なお、テーテンスがtranscendent, transcendentalと綴るところを、カントはtransscendent, transscendentalと綴るが、この異同に拘泥すべきではない。グリムの辞書でも、transcedent, transcendentalの項目に、特に注意なしにカントの用法が収録されている。cf. Jacob und Wilhelm Grimm, *Deutsches Wörterbuch*. Bd.21, München 1984, S.1236f.
- 9 比較的最近の研究においても、このテーマについて十分な検討がおこなわれているとは言い難い。Cf. 山本道雄「認識における二つの伝統——カントとテーテンス」『カントとその時代』見洋書房、2008年、286-305頁；Hans-Ulrich Baumgarten, *Kant und Tetens. Untersuchungen zum Problem von Vorstellung und Gegenstand*, Stuttgart 1992；Wolfgang Carl, *Der schweigende Kant. Die Entwürfe zu einer Deduktion der Kategorien vor 1781*, Göttingen 1989；Jeffrey Barnouw, The philosophical achievement and historical significance of Johann Nicolas Tetens, *Studies in eighteenth-century culture*, 9 (1979), pp.301-335.
- 10 『一般思弁哲学について』の底本として使用したのは、*Ueber die allgemeine speculativische Philosophie*, in: *Johann Nicolaus Tetens -Die philosophischen Werke*. Bd.IV. Kleinere Schriften, Teil 2, 2005 Hildesheim, S.1-94. なお適宜次の版も参照した。Neudrucke seltner philosophischer Werke, Herausgegeben von der Kantgesellschaft, Band IV, Berlin 1913, S.1-72. 以下、タイトルなしに頁数が示されているものは、すべて『一般思弁哲学について』からの引用である。なお、ことわりのないかぎり、傍点部は本文強調部分のしるしである。
- 11 「事物とその諸性状についての超越的概念 (die transcendenten Begriffen)、すなわち非物質的な客体にも、物質的な客体にも適合し、そして、卓越した一般性ゆえに、超越的、あるいは、スコラ哲学者たちのあいだでは、超越論的といわれている (transcendente, oder, wie bey den Schlasitikern, transcendentale heißen) 一般的な概念は、最近のたいていの哲学者たちによって、ためらいなく無限なものについての表象として使用されている。」Ueber die Realität unsers Begriffs von der Gottheit, Erste Abtheilung. (1778) in: *J. N. Tetens-Die philosophischen Werke*. Bd.IV, S.136-137.
- 12 Cf. Arthur Warda, *Immanuel Kants Bücher*, Breslauer, 1922.
- 13 Cf. Norbert Hinske, *Kants Weg zur Transzendentalphilosophie*, Stuttgart 1970, S.31Anm.
- 14 カントからの引用は、アカデミー版カント全集の巻数(ローマ数字)と頁数(アラビア数字)を括弧内に記す。ただし慣例に従い『純粹理性批判』からの引用は、A版=第一版とB版=第二版の頁数を記す。書簡と『プロレゴメナ』準備草稿の翻訳は岩波全集版に依拠しているが、変更を加えた箇所がある。なお、ことわりのないかぎり、傍点部は本文強調部分のしるしである。
- 15 テーテンスは『純粹理性批判』第一版が出版されたころ、何をしていたのか。1776年にテーテンスは、それまで在籍していたピュットウのアカデミーを離れ、キール大学の哲学正教授に着任する。ここでテーテンスは神学の正教授であるクラマー (Carl Friedrich Cramer, 1752-1807) と親しくなり、彼が発行する雑誌の協力者として多くの仕事をすることになる。この雑誌にテーテンスは哲学のみならず、神学の特殊問題などを扱う論文を寄稿するようになり、その活動の射程を広げていく (cf. Wilhelm Uebele, *Johann Nicolaus Teten*, Berlin 1911, S.19)。1783年に、「有限なもの無限なものへの依存性について (Von der Abhängigkeit des Endlichen von dem Unendlichen)」という論文の中で、『純粹理性批判』を取り上げているが、カントがこの著作で新しい形而上学の準備をしているという点は無視されている (cf. *J.N.Tetens- Die Philosophischen Werke*. IV 259ff. ; Engfer, Einleitung, XXXIX.)。さらに1789年に至って彼はキール大学を離れ、コペンハーゲンで財務関係の官職に就く。このようなテーテンスのキャリアの中で、『純粹理性批判』を徹底的に読解するために裂く時間は、もはやなかったのかもしれない。最近オスロで、1789年の形而上学講義のノートが発見され、その編集作業が

- キール大学のディルク・ヴェスターカンプ博士によって行われている。この講義は、「カントの超越論的哲学の初期の受容に関する重要なドキュメント」であるとされている。この講義の編集によって、状況はいくら関わるのかもしれない。以下のURLを参照。<http://www.philsem.uni-kiel.de/de/personen/westerkamp> (2012年11月23日閲覧)
- 16 この点に鑑みて、ユーベレは、『思弁哲学』があるからこそ、テーテンスは「ドイツのロック」と呼べると述べている (cf. Uebele, *Johann Nicolaus Tetens*, S.95)。カントとロックの関係については、渡邊浩一『『純粋理性批判』の方法と原理』京都大学学術出版会、2012年、28頁以下を参照。
- 17 Beck, *Early German Philosophy*, p.414.
- 18 たとえば、因果性の問題については、立場の違いがあると指摘されている。Cf. Uebele, *Johann Nicolaus Tetens*, S.77.
- 19 Rezension der Philosophischen Versuche, in *Kielische Gelehrte Zeitung 1777*, in: *J. N. Tetens -Die philosophischen Werke*. Bd.4, S.455.
- 20 キケロー (木村健治、岩谷智訳)『トゥスクルム荘対談集』(『キケロー選集12』)岩波書店、2002年、104頁。
- 21 この文言は、『純粋理性批判』の次の文章を想起させる。「形而上学が万学の女王と呼ばれた時代があった。そして、意志があればそれを実行したと同等であるとみなすならば、形而上学は、その対象の卓越した重要性ゆえに、たしかにこの女王という尊称に値した。いまや、形而上学にありとあらゆる軽蔑を示すことがこの時代の流行となっているので (Jetzt bringt es der Modeton des Zeitalters so mit sich)、この老貴婦人は、見捨てられ、追放されて、ヘクバのように嘆く…」(A VIII-IX)
- 22 18世紀のドイツ哲学において、理性と経験は決して排他的なものではない。18世紀の啓蒙主義の基本的な立場は、不可疑の第一原理から、演繹的にそのほかの原理を導出するのではなく、観察可能な諸現象を第一の所与として、その根底に存する原理や原因を、理性的な反省を通じて確保する、ということにある (cf. Engfer, *Einleitung*, XVII)。ヴォルフは、「第一哲学 (philosophia prima) (=「存在論 (ontologia)」)のような抽象的な学問においてすらも、「基礎的な概念は事実的な認識 (cognitio historica) の基礎である経験から導き出されなければならない」と述べる。事実的な認識は哲学的認識から注意深く区別されなければならないが、事実的な認識を軽んじるべきではない。「…哲学全体を通しての、事実的認識と哲学的認識の結婚 (connubium)こそ、われわれにとって神聖なものである」、これがヴォルフ哲学の目指す地点である。Cf. Christian Wolff, *Discursus praeliminaris de philosophia in genere in: Philosophia rationalis sive Logica, methodo scientifica pertractata. Praemittitur discursus praeliminaris de philosophia in genere*, Frankfurt u. Leipzig 1728¹ 1740³, § 12.
- 23 Johann Heinrich Lambert, *Anlage zur Architectonic oder Theorie des Einfachen und Ersten in der philosophischen und mathematischen Erkenntniß*, 2 Bände, Liga 1771.
- 24 Cf. Uebele, *Johann Nicolaus Tetens*, S.70.
- 25 明確に規定しているわけではないが、テーテンスは「理性 (Vernunft)」という概念を、思弁哲学、普遍的な原則、(観察と区別される限りでの)推論との関わりで用いる。一方、あくまで観察に足場を置き、思弁哲学の領域に踏み込まない認識を司る能力は、「通常の間知性 (der gemeine Menschenverstand)」と呼ばれる (cf. S.15ff.)。
- 26 カントの著作のなかで類似の表現がみられる箇所として、『神の存在の唯一可能な証明根拠』の冒頭 (II65f.) および、『純粋理性批判』第一版序文の冒頭 (AI) を参照。
- 27 カントの著作のなかで類似の表現がみられる箇所として、『神の存在の唯一可能な証明根拠』の冒頭 (II65f.)、『純粋理性批判』「フェノメナとヌーメナ」章の冒頭 (A235/B294) を参照。
- 28 ヴォルフは存在論を「存在者一般の学 (scientia entis in genere)」と定義しているが (cf. Christian Wolff, *Philosophia prima sive Ontologia*, Hildesheim 1962, § 1)、ドイツ語の著作では存在論の課題を「なにが一切の物一般 (alle Dinge überhaupt) に帰属し、なににおいてそれら物一般の区別が見出されるのか、吟味する」こと

と言っている (cf. Christian Wolff, *Vernünftige Gedanken von den Kräften des menschlichen Verstandes und ihrem richtigen Gebrauche in Erkenntnis der Wahrheit*, Hildesheim 1965, S.119.)。

- 29 Giorgio Tonelli, Das Wiederaufleben der Deutsch-Aristotelischen Terminologie bei Kant während der Entstehung der “Kritik der reinen Vernunft”, in: *Archiv für Begriffsgeschichte*, Bd.9, 1964, S.237ff.
- 30 Alexander Gottlieb Baumgarten, *Metaphysica/Metaphysik. Historisch-Kritische Ausgabe*, Suugart 2011.
- 31 Lambert, *Anlage*, § 301.
- 32 Cf. Lambert, *Anlage*, § 299.
- 33 Cf. Lambert, *Anlage*, § 29, § 48.
- 34 『思弁哲学』にランベルトの『建築術構想』への言及がある (cf. S.81.)。
- 35 テーテンスは『思弁哲学』において、「超越的哲学」、「基礎学」、「一般思弁哲学」を互換性のある概念として用いているが、対象領域の区別が問題となる箇所では、かならず「超越的哲学」を用いている (cf. S. 13, S.23, S.24, S.49ff. S.71)。
- 36 テーテンスは、思考能力の関与の仕方に即して、「一般概念 (allgemeine Begriffe)」を次のように区別している。まず「一般概念」が (A)「抽出、あるいは抽象された概念 (abgezogene oder abstrahierte Begriffe)」と (B)「自己形成的概念 (selbstgemachte Begriffe)」とに区別される。前者 (A) はさらに、(A-1)「感性的な抽象物 (sinnliche Abstracta)、あるいは一般的像 (allgemeine Bilder)」と (A-2)「抽出された共通概念 (abgezogene Gemeinbegriffe)」に区別される。A-1は個々の表象のうちに見出される、出現頻度の高い、類似する特徴であり、A-2は、A-1に反省が加わって、類似するものから差異が丁寧に除去されたものである。(B)「自己形成的概念」は (B-1)「抽象されたものをその単純な部分へと分解することによって」得られるものと、(B-2)この単純な部分を「結びつけ、変容させることによって」得られるもの、とに区別される。B-1は、推論や証明によって獲得される観念、B-2は「自己活動的な想像力の設計 (Entwürfe der selbstthätigen Einbildungskraft)」であるとされる。
- 37 学は「現実から最高原理へ向かう分析」と「最高原理から出発して、分析の途上に生じた矛盾を解消しつつ、経験的現実を再建する総合」という二つの方法によって構成される、とする (それ自体としては幾何学の証明法に由来する) 学問理念は、近世においてさまざまな哲学者によって採用されていた。このことについては、以下の文献を参照。福谷茂「物自体と『純粹理性批判』の方法」『カント哲学試論』知泉書館、2009年、所収。
- 38 福谷茂「物自体と『純粹理性批判』の方法」を参照。
- 39 Tonelli, Das Wiederaufleben der Deutsch-Aristotelischen Terminologie bei Kant während der Entstehung der “Kritik der reinen Vernunft” S.241. ちなみに、トネリはこの論文でテーテンスに言及していない。
- 40 拙稿「超越論的反省とは何か」『近世哲学研究』第12号 (2005年)、京都大学西洋近世哲学史懇話会編、75-98頁を参照。

Tetens' „Über die allgemeine speculativische Philosophie“ und Kant

Keita Sato

Johann Nicolaus Tetens (1736-1807) wird als „der eigentliche und wahre Vorgänger Kants“ gerühmt, dessen Werk Kant bei der Abfassung der *Kritik der reinen Vernunft* beständig konsultiert hat. Aber in den bisherigen Interpretationen ist hauptsächlich der Einfluß von Tetens' Psychologie auf Kants Philosophie im Brennpunkt des Interesses gestanden.

Dieser Aufsatz versucht, den Einfluß von Tetens' Metaphysik auf *Kritik der reinen Vernunft* aufgrund der eingehenden Untersuchung über Tetens' *Über die allgemeine speculativische Philosophie* (1775) zu prüfen. Nach dieser Untersuchung wird deutlich, dass Kants Entwurf der „Transzendental-Philosophie“ dem der „transcendenten Philosophie“ von Tetens als Muster nachfolgt. (Vor der *Kritik der reinen Vernunft* (1781) war das Wort „transcendent“ das Synonym für „transcendental“). Damit bestätigt sich auch die Wechselwirkung zwischen dieser zwei Philosophen. In *Über die allgemeine speculativische Philosophie* übernimmt Tetens die Theorie von dem Unterschied zwischen der sinnlichen Erkenntnis und der des Verstandes aus Kants *Dissertation* (1770) und führt daraufhin den neuen Ausdruck „die transcendente Philosophie“ als Ersatz für das bei den deutschen Schulmetaphysikern des 18. Jahrhunderts verbreitete Terminus „Ontologie“ ein. Kants „Transcendental-Philosophie“ steht keineswegs ganz für sich allein in der Geschichte der Philosophie, sondern ist der Erfolg, den die von Kant und den zeitgenössischen Philosophen gebildete gemeinsame Front gegen die Schulmetaphysiker des 18. Jahrhunderts erzielt hat.